安部慎二インタビュー

デビューの頃

——漫画を描き始めたきっかけからおうかがいできますか。

安部　それは、永島慎二先生の『青春裁判』を読んだ時に、漫画をやりたいと思ったんです。

——それはいくつの頃ですか。

安部　18です。

——何の雑誌だったか覚えてますか。

安部　いいえ、単行本です。友達がこれはいい漫画だからと言って、見せてくれたんです。それで読んでみたら、やっぱり魂を打つような絵柄で、全部が正しいような感銘を受けたんです。それから漫画家になりたいと欲したんです。だから「永島先生」と言っているわけです。

——絵はいつ頃から描かれているのですか。

安部　もうそれは、幼稚園時代から描いてました。

——実際に漫画を描かれたのは。

安部　やっぱり18の頃。『COM』に二本応募して駄目で、ビッグコミックも駄目で、その後ガロで『やさしい人』でデビューしたわけです。

——その頃は何をされてたんですか。

安部　美代子（奥さん）と16と15の時に恋愛関係にあった訳ですよね、高校時代に。向こうは上京すれば大学生になる。その間待つ一年間というのがあったんですよ。その間に『やさしい人』を描いた訳です。

——それは田川（福岡県、現住所）で。

安部　ええ、友達をモデルにしましてね。写真をどんどん撮って、それを基に作品にしたんです。

——一年後東京に行かれるわけですか。その頃奥さんは大学生として？

安部　ええ。

——安部さんは漫画家になる決心をして？

安部　いいえ、漫画家ということを考えたことは無いんですよね。ただ、同時代の同じような境遇の人達。もし自分に近しい人がいれば、そこに一つの何か、同じ悲しみを背負ってるんじゃないかっていう気持ちがあったんですよね。そういうものを描いて行こうと、そういう気持ちが段々高まっていったんです。話は飛ぶけど、『面白主義』ってあったでしょ。

——はい、ありましたね。

安部　あの頃『面白主義』というものに対して非常に抵抗があったわけですよ。おそらく翁二も同じだったと思うんだけど。それは漫画は面白ければいいんだと、じゃあその面白いものとは一体何なのかと。あの時代嵐山さんとかと意見の相違があったし、そりゃ面白いものを描くのは当然ですけどね。

——あの頃は精力的に描かれてましたね。

安部　けっこうボツになったのもあるんですよ。

——当時はどういう生活をされてましたか。

安部　あの頃、上村一夫さんが同棲時代というのを一緒に描かないかという話があったんですよ。美代子と同棲生活してたんでね。

——どちらで暮らされてたんですか。

安部　阿佐ヶ谷です。それは、永島先生がいたから阿佐ヶ谷に住んだんですがね。

▲奥さん・美代子さん

◀炭住にて

尊敬する漫画家はつげ義春

安部　僕が一番尊敬する漫画作家は『つげ義春』なんです。

――あの頃翁二さんと二人でつげさんを訪ねたりしてますよね。

安部　行きました。

――『無頼の面影』では多摩川につげさんを訪ねて、後の『無能の人』につながる会話なども書かれてますね。つげさん自身も安部さんの作品は評価されてるとおっしゃってました。

安部　今、『つげ義春』を越えようと思ったらですよ、もう一本描かねばいかんわけですよ。40代の魅力を出さないかんわけですよ。それが本人（奥さん）が写真を撮られることをすごく嫌がってて、だからそうもいかない。もし『つげ義春』を抜くとすればね、安部慎一が抜いて欲しいんですよね。40代の裸婦を描けば抜けると思うんですがね。

――美代子さんとの出会いというのは？

安部　それは高校時代に、僕は新聞部の部長をやってまして、そこに新入部員で入ってきたんですよ。そしたらその、深い、昔あたかもインドで出会ったような、『懐かしい目』をしてたんですよ。それが恋愛と言えるのでしょう。懐かしかったんですよ、初めて会った時から。それは翁二のとこにも言えるんじゃないですかね、会った時から懐かしい、と。

――今回再録させて頂いた『美代子阿佐ヶ谷気分』もそうですが、安部さんの創作上で美代子さんの存在というのは相当なものですね。

安部　好きだったんですよ。

「純漫画」を大事にしたい

安部　翁二も面白い男でしょ。

――はい。

安部　子供が三人もいるんだから働けって言うとるんだけど、なかなか働かない珍しい人種で。しかし僕の印象では、山中さんに変わってからガロに作品を出すという事は、非常にそのある種の大変さを感じるね。

――どういう事ですか。

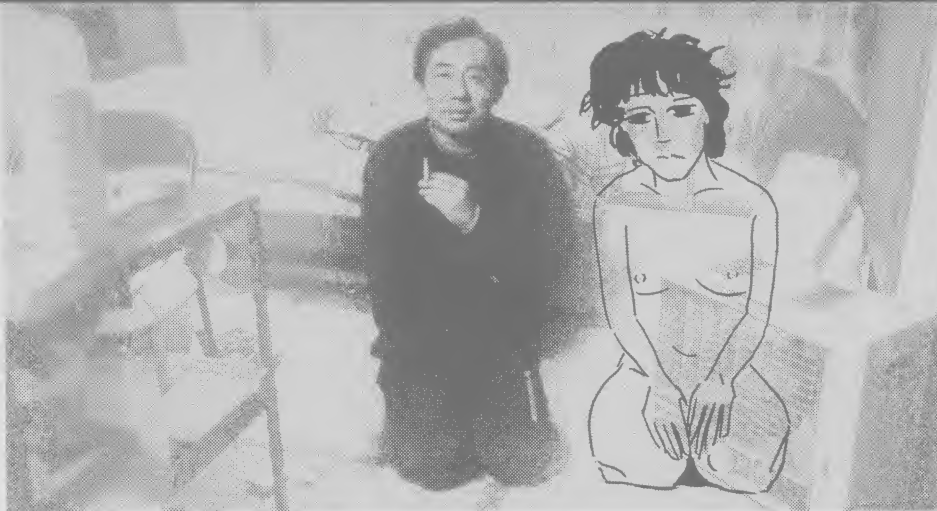
安部　それはね。幅広いという事よ。宗教家にもふた通りのタイプがあって、自分はじっとおって、来るのを待つのと、自分が動いていくのと、その違いだけど。僕は漫画を『純漫画』と『大衆漫画』に分けた場合、『純漫画』を大事にしたいわけなんだけどね。

――安部さんの漫画を描く上でのテーマって何ですか。

安部　テーマなんて無いわけですよね。僕の場合、女房と一緒になるにはどうしたらいいかと、そのことばかり考えてましたから。一緒になってなおかつその女体をね、どう操るのか。そういうような考えだったから。

――安部さんにとって奥さんは初めての人だったのですか。

安部　そうです。あなた、何人も体験あるの。僕は気に入らないのはね、翁二はね何人も体験あるでしょ、そういうのは気に入らないわけ。

――安部さん自身はどうなんですか。

◀安部氏自宅にて

安部　僕は二人。奥さんと、奥さんの親友と関係しましたけどね。若い頃。

――安部さんの漫画の中で、よく性的な所有といったテーマが見受けられますが。

安部　それはね、女房は浮気をしないで欲しい。そういう願望なんだけれど。僕は感知した色んな事は、全部その人にやらせよう、と思ったわけ。そういうことで『阿佐ヶ谷心中』も描いたわけ。

――漫画に描かれていた事は実際にもあったんですか。

安部　「僕は体験した事以外描かない」と言った事もあります。

――そういう安部さん自身の考えとは。

安部　そう、それは僕自身も知りたい。分からないから。ただね、女は浮気してるように見えるわけよ、顔見てると。そしたら先にそうやらせちまおう、そういうふうに思ったわけ。

――なにか具体的に精神的な『傷』のようなものがあったのですか。

安部　いや、女房の性格、誰とでも仲よくなるという、それに傷ついたわけ。傷ついてもしょうがないけどね。たとえば永島慎二のビッグコミックに載った作品に、秀逸な作品があるんだけど。片方の男と一緒になると気絶するわけよね、SEXの最中に。もう片方の男とだとそうじゃない。それは同じようなテーマでも楠勝平も描いてましたが、片方の男は女を犯されることによって強くなろうと思った、片方は傷ついた。そういうことです。

――当時の生活は今ふりかえってみると、どのように思い出されますか。

安部　きついですね。もしここにイエスが神としているなら、イエスには解るかも知れない。だけどきついですよ。

――それはどういう事ですか。

安部　例えば鈴木（翁二）さんの作品が出て、それがトップにたっても、そういう事が自分の安らぎに通じないとすれば、もっと安らぐ方式を見付けるべきだしね。

――今も漫画に対する思いは当時と変わらず、ですよね。

安部　永島先生があれは本物だって誉めてくれた事は記憶に残ってますけど。

――最近の漫画についてはいかがですか。

安部　今でも漫画家の中ではつげ義春が一番上だと思う。その後、林（静一）さんもね、『グッピーは死なない』ね。林さんの技法というのが分からないわけよ。物凄い技法だね。あの絵は物凄い達人の描いてる絵だね。林静一というのは、馬鹿に出来ないですね。なんで、どういう技法であれを描いたのか。普通描けないはずなんだけどね。

ガロは儲ける方針で行くのか

――東京にはいくつの頃までいらしたんですか。

安部　最初は二十二、三。その時長井さんは「逃げた」って怒ったんだけど。僕は実際にあったことしか描けないから、実際にあった生活をあれ以上続けたら自分の方が駄目になるから、それで逃げたわけだけどね。

――その時田川に戻ってこられたんですか。

安部　いや福岡。

――その頃は漫画描いてなかったんですか。

安部　いや『悲しみの世代』というのを描いてました。

――安部さんにとって、今一番関心のある事は何ですか。

安部　何で俺みたいなところに、お前みたいなやつが来たのか。それに関心がある。何しに来たのか、って。あとガロは儲ける方針で行くのか、儲けない方針で行くのか、それをはっきりしなければ。

――今当時の作品を読み返してみるといかがですか。

安部　苦痛だよね。

――どういう苦痛なのですか。

安部　……ちょっと呑まねば持たないくらい苦痛なんですよ。そろそろ寝させてください。

――今日はどうもありがとうございました。新作も期待して待っております。

■収　録…1993年3月2日
福岡県田川市の安部氏宅にて
■聞き手…山中　潤（写真も）
■文　責…ガロ編集部